

たとえ一個の全王国を、あるいはまたこの世の数々の全財宝を持っている人があるとして、その人がそれらの所有物を唯々神の御為にのみ全く捨て去り、地上の最も貧しい人々の一人となったなおその上に、神が彼に向かつて、およそかつて一人の人間に与え給うたほどの悩みという悩みを悉く与え給い、この人がその全てを終生、死の間際まで悩み抜いたと仮定したとしても、もし神が彼に唯の一瞬間だけ、あの靈魂の内なる力における彼の真相を直観することを許し給うたならば、彼の歓喜は、彼の味わいし一切の悩み、一切の困窮も、彼には未だ余りにもささやかなものであったと思われるほどに大きいものであるだろう。否それのみか、たとえその後神が彼にもはや二度と再び天国を与え給わなかったとしても、彼は彼が味わいし全ての悩みに対して充分過ぎるほど充分な報酬を得たといひ得るであらう。なぜならば、神はこの力において、まさに永遠の今において在し給うごとく、在し給うからである。

マイスター・エックハルト『神の慰めの書』

（相原信作訳、講談社学術文庫、一九八五、一六九—二七〇頁）